「第一回盲導犬歩行国際交流セミナー」'84
米・シーイングアイに学ぶ

大泉真佐子

10月、12.13日の2日間 笹川記念館に於て 第一回盲導犬歩行国際交流セミナーが開かれました。海外からは、アメリカ、シーイングアイより訓練部長のMr.リチャード、クロッカスが講師として来日し、日本国内に於ても、東京盲導犬協会の塩谷先生をはじめ、九州から北海道まで6ヶ所の盲導犬協会、又ボランティアの方々、盲導犬使用者(もちろん盲導犬もいっしょに。)その他、さまざまな方面の方が参加致しました。

当、東京南ロトリークラブからは、ブリーダーとして新倉純子さんと私の2名が参加しました。

初日は未訓練犬を使ってのクロッカス氏によるシーイングアイの訓練法など拝見致しましたが犬の犬格を尊重すると云いましょうか、犬の気持をリラックスさせ、又冷静さを保たせながら、教えるなど精神面でのコントロールが非常に素晴らしく、細かな動作ひとつでもやはり50年の歴史の厚みを感じさせるテクニックが、随処に感じられました。　シーイングアイでは、訓練に入る前に指導員は犬と1日～1日半の時間を費やし遊んでやるそうで、特にシャイな犬程時間をかける

そうです。　訓練の際も人間側は自分の気持や感情の起伏を犬に決してぶつけないことがモットーで、それが犬の信頼を受けることにもつながり、又訓練もスムーズに進むことになるそうです。

アメリカには10ヶ所の訓練所があり その中でもNAC（認定機関）の認定を受けた4ヶ所の大きな施設が、定期的に研究会など開いて交流しているそうで 指導員は ほとんど大卒ですべて免許制、55才定年です。

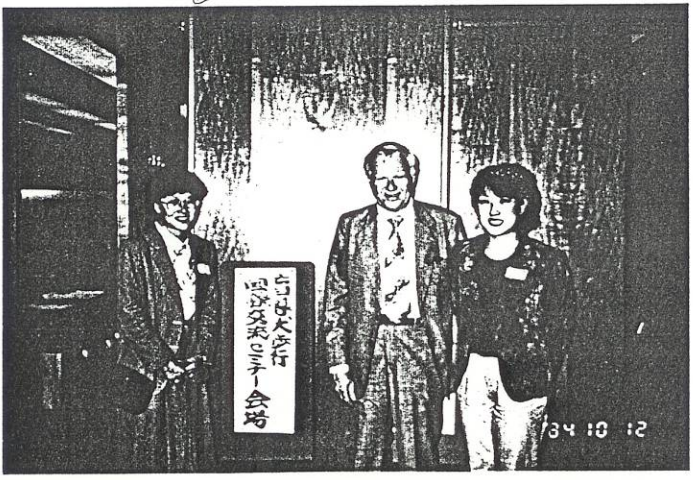
シーイングアイの職員は90人、そして指導員は12人、そのうち5人は女性です。　アメリカの盲導犬使用者は、現在17,000人、このうち1,580人がシーイングアイの卒業生で（去年は231人）アメリカの代表的施設と云えるでしょう。　そんなシーイングアイでも、数年前までは、盲導犬の成功率が40～50％程度でしかなかったそうですが、今では80～90％に延びたのは、やはり繁殖犬の選択が大きなポイントだったそうです。

繁殖犬は一頭づつ性格など細かく分析し、点数制で記録され、高い点数同士と云う風に組み合わせているそうで、その中には全く近親犬は含まれていないそうです。

現在は牡10頭（ラブ6頭 Gシェパード4頭）

右より 塩谷賢一氏、クロッカス氏、そして私です

新倉純子さん



牝32頭（ラブ15頭 Gシェパード17頭）の選ばれた犬たちがいます。　将来はコンピューターで交配の組み合わせを決めて行く方針だそうです。

施設の規模や環境などについては云うまでもなく、日本の現状とはかなり開きがありますが盲導犬が出来上るまでの行程はほぼ同じようでした。　講義のあい間にクロッカスK氏持参のフィルムを見ました。　それは、シーイングアイの繁殖場、又子犬が飼育奉仕者に渡され、一人前になるまでのもので、もちろん訓練中の様子や美しいモーリスタウンの街や並木の中を歩く、ゴールデンや、シェパード、イエロー、ブラック、チョコレートのラブラドールが沢山出て来ました。　もちろん皆さんが、ご覧になったら、すぐほしくなるような子犬も出て来ました。

シーイングアイでは、日本で云う飼育奉仕者、又パピーウォーカーを、フォーエイチ（4H）クラブメンバーと呼び、そのほとんどが責任の持てる子供たちで、預けられた犬の医療費、食費はすべてシーイングアイから支払われます。　メンバーは、子犬を生後9～10週で預けられ、14～15ヶ月まで世話しますが、週に一度、7～8人のグループに別かれて公園などに集まり、年長のリーダーに自分がどの位犬に服従を

教えられたか見せたり、又判らない所を習っているそうで、そのテクニックはクロッカス氏曰く日本のインストラクター顔負けのものだそうです。　特にヒール（左に犬をつけて歩く）の練習など、子供と犬が、リーダーを中心に輪になって歩いて回る所はショーリングでの風景とちっとも変わりません。

手術する時期が近づくと、子供たちは、自分の預かっている犬をつれ、気軽にレストランに入ってマナーを教えたり（テーブルマナーではございません。）、訓練コースの途中のお店屋さんも、訓練中の犬の為にわざと障害物として大きなポリバケツを歩道に置いたりします。　又盲導犬と盲人が道路の横断を始めても、一般のドライバーは車を止めて渡すべき所と、そのまま止まらずに進むべき所の区別を守るなど、モーリスタウンの住民や町全体が協力していること、又盲導犬がしっぽを左右にピッピッと振って、笑顔で意欲的に仕事をしている姿が、非常に印象的でした。

長いようで短かい2日間のセミナーも終わり、専門職の方が多い中、我らも負けじと参加させて頂きましたが、やはり専門的な内容の多いセミナーでしたので、時には上と下のまぶたがピッタリくっつきそうになったりしまして、お互いに、肘で、つつき

合ったり、数年ぶりに学生の気分を味合うことが出来ました。　又クロッカス氏の暖かいお人柄に触れられたこと、そして正眼者の私たちでは日頃気付かないことなども、訓練士の方の立場や育人の方の立場からの意見の交換などで知ることが出来たり、何よりもクロッカス氏のお話しにもありました、いかに犬の天性と合わせて、成長過程の体験が犬格形成に大切であるかを、盲導犬に関係なく、家庭犬としても同様に重要なことと云えますので、繁殖をする際又、子犬を育てる際に、再認識しておきたいものです。

印象的であったことを、大まかにざっとまとめてみましたが、さらにシーイングアイの訓練の資料などに興味あるかは御一報下さい。